

山川草木悉有仏性

日本の仏教ではよくこんなことを言う。山も川も草も木もみんな仏なんだ。悟っているんだと。分かったような分からないような。それでもこの言葉は一人歩きして自然は仏なのだから大切にしようということになって、環境問題の会合で突然この言葉が飛び出してきたりしているようだ。

悟るのはものを考える能力のある人や神々のような存在であって、本来仏教では植物や自然環境は輪廻の中に含めないのだから、悟るということはないし、解脱もない。それでも我が国の仏教ではよくこの言葉が使われる。

私はこの言葉、山川草木悉有仏性とは、自然に仏性があるとか、もともと悟っているということではなく、その自然の中にお釈迦様が教えられた悟りへ至る教え、真理、法則がそのまま見いだし得る、私たちが悟るために学ぶべきものがある、あたかも仏が説法しているかの如くそこから教えが聞こえてくる、ということではないかと考えている。

だからこそ自然は仏なのだ。なぜならば、仏とは私たちが悟りへ至らせるために教え導く存在であるのだから。何気なく見る草や木々の生態に、自然界の法則がそのまま窺い知られる。川の流れ、大地の転変にこの世の真理を見いだすことが出来る。

だからこそ、そこに仏陀の本性が見いだされるのであり、仏と言われるに匹敵する智慧が隠されている。ということは、本来、あらゆるすべてのものから私たちが教えを得ることが出来るということになり、やはり必要なのは私たち自身のそれを受け取る能力、感性、探求心が求められているということなのだと思う。

ほごりにまみれた身体(からだ)を洗い流すことはできますが、心のほごりを拭(ぬぐ)いさることはなかなか難しいことです。

物質的に豊かになれば、それにつれて私たちの欲望も増え、その欲には際限がありません。

宝石は掘り出された時は一塊(いっかい)の原石ですが、それに磨きをかけると美しい光が出てきます。しかし、ただの石ころをいくら磨いても光は出てきません。

それと同じように、もし私たちの心の中に光るものがないとしたら、どんなに熱心に修行したとしても、心のほごりは拭いきれないでしょう。

でも、お釈迦さまは、私たちはみんなもともと仏(ほとけ)になる可能性を備えているとおっしゃっておられます。それを仏性(ぶっしょう)といい、だれでもがもち合わせています。

言い換(か)えると、私たちのもっている仏性は心のほごりに覆(おお)われているため、その光が出てこないのです。

ほごりにまみれた身体を洗い流し、温かいお湯にゆっくりと入った後のような清々(すがすが)しい気持ちで仏さまに手を合せる。その時の心はとても清らかだと思えます。

私たちの中にある仏性を磨くこと、それは心のほごりを拭うことです。

日頃から、こうしたことを心掛け、仏さまに感謝の気持ちを捧(ささ)げ、ご加護(かご)を信じて拝む。こうした地味な行いを積み重ねながら、一步一步歩んでゆくということが何よりも大切なことだと思えます。

